

手話言語の世界を垣間見る

上田 由紀子

(うへだ ゆきこ)

人文学部副学部長

2024

近年、日々の内閣官房長官記者会見や緊急災害時の報道には必ず手話通訳がついている。以前に比べ目に触れることが増えた手話であるが、手話が英語や日本語、その他の音声言語と同様に、一つの独立した自然言語であるという認識を持っている人は少ないかもしれない。ここでは、日本手話 (Japanese Sign Language: JSL) の例をあげながら、「手話言語 (Sign Language)」について少しお話ししたいと思います。

日本で手や指を使用する言語には大きく分けて2種類ある。一つは、手指日本語 (日本語対応手話) と呼ばれるもので、もう一つが、日本手話 (JSL) である。手話言語を日常的に使用しない人々にとっては、両者が異なるものだという感覚はほとんどないのではないだろうか。両者には決定的な違いがある。手指日本語 (日本語対応手話) は、音声言語である日本語をそのまま手話単語に置き換えているだけであるので、語順や文法は音声日本語と同じであり、言語学的には日本語である。従って、前者は日本語を母語として獲得したことのある中途失聴者や難聴者に大変有効な表現法である。一方、日本手話は語順や文法が音声日本語とは異なり、音声日本語とは異なる個別の言語と言える。日本手話は、ろう者の母語であり、その母語話者 (サイ

イナー) の数は非常に限られてる。手指日本語と日本手話の違いについて興味のある方は、木村晴美 (著) 『日本手話と日本語対応手話 (手指日本語) : 間にある「深い谷」』生活書院、2011年を参照されたい。両者の違いを具体例を示しながら解説している。

では、日本手話の持つ音声言語にはない特性とは何か。ここでは「同時性」と呼ばれる特性を紹介したい。この特性により日本手話は出力に対して効率の良い言語だということがわかる。例えば、音声日本語では、「丁寧に洗う」という意味を表したいとき、「丁寧に」と「洗う」を同時に発話することはできない。出力手段が音声しかないのが、時間軸上「丁寧に」の後に「洗う」を発話するしかない。一方、日本手話では、手指、顔、肩、頭の動き、視線など複数の出力器官を持つ。従って、日本手話では、音声日本語同様、(1a)のように、「丁寧に」にあたる表現と「洗う」にあたる表現を独立して表出することもできるが、(1b)の網掛け部分のように、動詞の手指表現の「洗う」と副詞の非手指表現の「_____丁寧に」を同時に別々の器官で表出させ、「丁寧に洗う」という意味を示すことができるのである (非手指表現の「_____丁寧に」は、口角を引き締め、目を細めるといった動作として現れる)。

(1) a. _____ TOP _____ 丁寧に
佐藤 昨日 車 丁寧に 洗う
‘佐藤さんは昨日車を丁寧に洗った。’

b. _____ TOP _____ 丁寧に
佐藤 昨日 車 洗う PT佐藤

← 手指以外の器官を使った表現

PT佐藤 ← 手指を使った表現

← 手指以外の器官を使った表現

← 手指を使った表現

私がこの現象に興味を持つ最大の理由は、手話言語に見られるこの非手指表現は、単なるジェスチャーやたまたま表出された表情ではなく、高度に文法化された表現形式であるという点にある。例えば、日本手話のwh疑問文において、手指表現の「だれ」と同時に非手指表現として、まゆ上げ、目見開き、首振りが見られる。これらは、サイナーがいかなる状態や感情であろうとそれとは全く無関係に、wh疑問文を構成する文法的な形態素として義務的に表出されるものである。そして、この高度に文法化された手指以外の文要素も自然言語一般に提案されてきた原理や制約に従っ

ていることも世界の様々な手話言語のデータから報告されている。

最後に、日本手話において、目、眉、口といった器官は、この高度に文法化された非手指表現の出力として大いに機能しなければならない。そのため、日本語を話しながら、日本手話で会話することは不可能なはずなのだが、そのようなシーンをドラマではよく見かける。手話というと手や指の動きが注目されがちであるが、手指以外の部分が手話言語を形成する重要な要素であることが多少なりとも伝わったとしたら嬉しい限りである。